九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

存在論的デフレ主義を再考する

倉田, 剛
九州大学大学院人文科学研究院 : 准教授

https://doi.org/10.15017/2004793

出版情報：哲学論文集. 54, pp.1-18, 2018-09-29. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

存在論的デフレ主義を再考する

倉田　剛

序

近年の分析形而上学における存在論研究は、しだいにメタレベルの考察にシフトしつつある（Chalmers *et al.*（eds.）2009）。このことは、二〇世紀の半ばに「再興」した現代の存在論が、ある成熟期に到達したことを示すと同時に、広く受け入れられてきた方法論の自明性が揺らぎ始めたことを意味しているように見える。実際、存在論の方法をめぐる昨今の議論は、標準的な枠組み（クワイン的メタ存在論）と、それに異議を唱えるいくつかの枠組み（非クワイン的メタ存在論）との対立の構図で理解されることが多い。

本稿は、「非クワイン的」と称するメタ存在論の中でもとりわけ、「存在の問いは世界の構造に関する実質的な問いではない」と説く存在論的デフレ主義に焦点を当てる。[1] 現代のメタ存在論において、こうしたデフレ主義は、主にハーシュの量化子変動（quantifier variance）の理論とトマソンのイージー・アプローチ（“easy approach” to ontology）という二つの立場に区

分される（Hirsch 2011; Thomasson 2015）。前者によれば、多くの存在論的論争はたんなる「言葉づかいに関する論争」（verbal dispute）にすぎないとされ、後者によれば、存在の問いは決して難しい問いではなく、むしろ「簡単な」仕方で解決可能だとされる。これら二つの立場は、ともにカルナップの洞察に着想を得ているという意味で、しばしば「新カルナップ主義」（neo-Carnapianism）とも称される。本稿において、われわれは、昨今のデフレ主義者たちに共通して見られるトリヴィアルな論証に訴えずとも、彼らの目的――深遠な（deep）問いとしての「存在の問い」を否定すること、その帰結としてある種の「常識存在論」を擁護すること――は十分に達成されうることを示すと同時に、われわれが支持する、より穏健なオルタナティヴ（「実践的アプローチ」）の輪郭を素描するつもりである。

第一節では、通常の意味で解されたクワインの「標準的メタ存在論」を概説したうえで、それに対する異論を紹介する。続く第二節と第三節では、とりわけクワイン的な理論選択の方法に異議を唱える二つのデフレ主義、すなわち量化子変動の理論とイージー・アプローチを批判的に検討する。そのうえで最後の第四節において、トリヴィアル性に訴えない「実践的デフレ主義」の可能性を、いくつかの具体的な事例を用いながら模索することにしたい。

第一節　標準的メタ存在論

今日の分析哲学者たちのあいだで共有されたコンセンサスによれば、現代存在論の創始者は他ならぬクワインである。現象学の伝統をも視野に入れれば、このコンセンサスには若干の留保が付くとはいえ、少なくとも分析哲学において、「存在論」という言葉を復活させ、その基本となる課題と方法を定めたのは誰あろうクワインである。彼が設定した課題と方法（これを「標準的メタ存在論」と呼ぼう）は次のように要約することができる。

存在論の課題　「何が存在するのか?」（'What is there?'）
存在論の方法①　存在論的コミットメントの基準（criterion of ontological commitment）
存在論の方法②　理論選択（theory choice）

存在論の課題は自明であるのか。今日、「基礎づけ（grounding）の理論」を構築する論者らによれば、存在論の課題は、「何が存在するのか」ではなく、むしろ「何が何を基礎づけるのか」（what grounds what?）という問いに答えることである（Schaffer 2009）。彼らは、アリストテレスの存在論（形而上学）を引き合いに出し、そこでは性質や数が存在するか否かといった問いはさして重要ではなく、むしろそれらがどのように（how）存在するのかという問いこそが中心的であったと言う。すなわち、伝統的な存在論ではもっとも基礎的なもの（実体）から、その他の存在者がどのように派生するのかという問題に重きが置かれていたのである。よって、クワインの課題設定は必ずしも自明であるとは言い難い。

クワイン的課題に答えるための方法としてよく知られているのは、①の「存在論的コミットメントの基準」である。この基準は「存在するとは変項の値であることだ」という標語によって表現されるが、より正確には以下の一連の手続きの中でその役割を果たす。

（i）われわれが承認する最良の（科学）理論を構成する文を一階述語論理の言語に翻訳せよ。
（ii）量化構造を明示化したその翻訳から存在論的コミットメントを取り出せ。
（iii）当該の理論（ないし文）がコミットする対象の存在を認めよ。

こうした手続きは、パラフレーズの手法を伴って、多くの存在論者たちに方法論上の指針を与えてきた。しかしながら、

昨今の虚構主義やマイノング主義からの異論に見られるように、それは少なくとも自明視される方法ではなくなりつつある。[2]

クワイン的方法の②は「理論選択」という言葉で要約される。「私の考えでは、ある存在論を受け入れるということは、ある科学理論、たとえば、物理学の体系をわれわれが受け入れることと、原理的に同様である」（Quine 1963: 16; 邦訳二四頁）と述べるように、クワインは、存在論が科学理論と同様の仕方で選択されると考えていた。このことは、存在論が一群の理論的美徳（単純性、説明力、経験との適合性など）によって評価されるということ、ゆえに存在の問いは「真面目」な問いであり、一定の仕方で解決可能であることを含意する。こうした理論選択が、コミットメントの基準とともに、多くの存在論者たちによって受け入れられてきた標準的方法であることは疑いえない。

本稿で議論の俎上にのせる「非クワイン的メタ存在論」は、この理論選択の方法とその含意に疑問を呈し、存在の問いを実質的な問いと見なさない立場である。こうした立場は「存在論的デフレ主義」（ontological deflationism）と呼ばれる。[3] 次節では、現代の議論の中で最も頻繁に言及されるデフレ主義、すなわちハーシュの量化子変動の理論について、続く第三節ではトマソンのイージー・アプローチについて考察を行いたい。

第二節　量化子変動の理論

ハーシュによれば、存在論的論争の多くは言葉に関する論争である。「言葉に関する論争」とは何を意味するのか。以下では、メレオロジストと反メレオロジストとの論争、とりわけメレオロジー的和（mereological sum）の存在を主張する論者とそれを否定する論者との論争に即して、その意味を検討しよう。両者の主張はそれぞれ次のように表現される。

（M）クリントンの鼻とエッフェル塔から成るものが存在する。（∃x（xはクリントンの鼻から成る＆xはエッフェル塔か

ら成る））

（N）クリントンの鼻とエッフェル塔から成るものは存在しない。（「∃x（xはクリントンの鼻から成る＆xはエッフェル塔から成る））

文字通りにとれば、メレオロジストの主張（M）と反メレオロジストの主張（N）は互いに両立不可能である。一方が真であれば、他方は偽でなければならない。だがハーシュは、（M）と（N）が両立可能であると言う。つまり（M）はメレオロジストが話すM言語において真であり、（N）は反メレオロジストが話すN言語において真であるとされる。なぜだろう。答えは単純である。M言語とN言語における存在量化子は、それぞれ異なる意味をもつからである。ハーシュが自らの理論を「量化子変動」の理論と呼ぶゆえんはここにある。

この理論では、「文脈的に制限された量化子」（contextually restricted quantifiers）ではなく、「意味論的に制限された量化子」（semantically restricted quantifiers）という考え方が重要となる（Hirsch 2011: 154）。前者の量化子は、ある文脈の中で量化の範囲を制限する（普段の会話における「ビールがない」は「この冷蔵庫の中にはビールがない」という制限量化として理解される）のに対し、後者の量化子は、ある言語のうちにインプリシットに含まれる意味論的規則によって量化の範囲を制限する。こうした（意味論的）仕方で制限が行われる場合、量化子は会話の文脈といったものに関係なく、つねにその範囲を制限される。先に挙げた例で言えば、メレオロジストが話すM言語は「αとβから成るものが存在するのは、『α』と『β』が何かを指示するとき、かつそのときにかぎる」という意味論的規則をもつ（*ibid.*, 72）。この意味論的規則によって、M言語における量化子（∃）が束縛する変項の値の範囲が定まるので、（「クリントンの鼻」も「エッフェル塔」も指示表現であると仮定すると）M言語において（M）は真である。すなわち、クリントンの鼻とエッフェル塔から成るメレオロジー的和は存在する。これに対し、反メレオロジストが話すN言語は次の意味論的規則をもつ。「αとβから成るものが存在する

のは、『α』と『β』が何かを指示し、かつそれらの指示対象がある特別な仕方で結合しているとき、かつそのときにかぎる」。N言語における量化の範囲は、この意味論的規則によって制限されるので、（クリントンの鼻とエッフェル塔とのあいだには何の特別な結合もないと仮定すれば）、N言語において（N）は真である。このように量化子の意味は、各言語がもつ意味論的規則によって変動する。これより、多くの存在論的論争は、量化子の意味が一義的であるという誤謬にもとづくものであり、ゆえに言葉に関する論争にすぎないと結論される。

しばしばハーシュの立場は「新カルナップ主義」と呼ばれる。よく知られているように、カルナップは、クワインが存在論の「リヴァイヴァル」を企てた二〇世紀中葉に、存在論の問いは、世界の構造に関するものではなく、言語的フレームワークに関する問いにすぎないと主張した（Carnap 1956）。存在論の問いは、科学の問いと同様の仕方で解決されうる「真面目な問い」だと説くクワインと、それに懐疑的なカルナップという対立の構図が正しければ、量化子変動の理論は、明らかにカルナップの側に立つと考えられる。

とはいえ、ハーシュ自身は、言語相対主義者でも言語観念論者でもない。すなわち、彼は「異なる言語を用いる者は異なる世界に住む」と主張しているわけではなく、また「存在するものは言語に依存する」という見解を支持しているわけでもない（Hirsch 2011:101-102）。それどころか彼は常識存在論（common sense ontology）の強力な擁護者であり、改訂主義的存在論に敵対する立場に立つ（Hirsch 2011: Ch. 6. “Against Revisionary Ontology”）。だが、このことが、量化子変動の理論のテーゼ「世界を記述する唯一の特権的な存在論的言語はない」（*ibid.*, xii）とどう折り合いがつくのかは必ずしも明白とは言えない。なぜならこうした「言語多元主義」と「常識存在論の擁護」とのあいだには埋めるべきギャップがあるように思われるからだ。[4]

第三節　イージー・アプローチ

近年トマソンが提唱する「イージー・アプローチ」もまたクワイン的な理論選択の方法に懐疑的なデフレ主義の立場として知られる。この立場は、存在の問いが「イージー」な仕方で解答可能であると説くが、それはいかなる意味においてなのか。

トマソンは、存在の問いはたんなる概念分析、あるいはそれと経験的探求との組み合わせによって解決されると主張した（Thomasson 2015）。この主張を以下で検討しよう。

初期段階のイージー・アプローチにおいて、存在主張の真理条件は、「存在する」（exist）という語、および種名辞〈K〉の使用規則から理解される[5]。トマソンによれば、存在主張について次の図式（E）が成り立つ（Thomasson 2008）。

（E）Kは存在する⇔〈K〉は指示する（Ks exist ⇔ *K* refers）

この（E）は、存在の定義というよりは、むしろ「存在する」と「指示する」の使用規則のあいだの結びつきを表現するものである。（E）の具体的なインスタンスとしては「犬は存在する⇔〈犬〉は指示する」などが挙げられよう。犬が存在するのは、〈犬〉という名辞が指示的であるとき、かつそのときに限る。こうしたインスタンスに異議を唱える人はほぼいないと思われる。なぜなら、犬が存在すると主張するにもかかわらず、〈犬〉が指示的でないと主張することは奇妙であり、その逆も然りだと考えられるからである。そうした主張をする者は「存在する」の使用規則と「指示する」の使用規則との結びつきを理解していないことになる。だが、そもそも種名辞〈K〉が指示するとはいかなることなのか。トマソンはこれを〈K〉

の適用規則（application conditions）に訴えて説明する。

（R）〈K〉は指示する⇕〈K〉の適用条件は充足される

〈K〉の適用条件とは、〈K〉がどのような状況のもとで正しく適用されるのか（あるいは誤って適用されるのか）を決定する規則であり、それは、話し手たちが、様々な状況において〈K〉を適用するまたは拒否する規範的な実践を通じて確立される意味論的な使用規則でもある（ibid., 67）。〈像〉という名辞を例にとろう。〈像〉の適用条件が充足されるとはいかなることか。大雑把に言えば、〈像〉の適用条件は、人によって意図的に形を整えられた物質の塊が存在するということだろう。この条件は充足されると考えられるので、（R）より、〈像〉は指示を行う。したがって、（E）より、像は存在するという結論が導かれる。

イージー・アプローチは、常識存在論をその一部とする寛容な存在論を帰結するが、決して「何でもあり」というわけではない。このことを〈K〉の適用条件が充足されない事例を用いて示そう。〈魔女〉という名辞の適用条件とは、悪魔と契約を結ぶことによって超自然的な力を授けられた女性が存在することだと思われる。当然、そうした力をもつ女性はいないので、〈魔女〉の適用条件は充足されず、ゆえに指示に失敗している。したがって、（E）より、魔女は存在しない。同様のことが、〈フロギストン〉などにも当てはまる（*ibid.*, 74-75）。

ここで行われていることは何か。まずは概念分析である。これは〈像〉や〈魔女〉の適用条件を明示化する作業だと言い換えてもよい。次に、経験的探求が必要となる。つまり、概念分析によって析出された事象（適用条件が要求する事象）が、実際に観察されるか否かは経験的な仕方で決定される。「存在の問いは概念分析と経験的探求との組み合わせによって解答可能であるという」トマソンの主張はこのように解することができる。

他方、たんなる概念分析だけで存在の問いが解決されるケースもある。より近年のイージー・アプローチでは、こうした方法が重視されているように見える。トマソンによれば、存在の問いに関する「デフレ主義的論証」とは、疑いの余地のない主張から出発し、ある「接続原理」を経て、トリヴィアルな仕方で存在論的主張を導き出す論証を指す（Thomasson 2015）。たとえば「性質は存在するか」という問いに対しては次のような論証が成り立つとされる。①そのお椀は青い。②xはFであるならば、xはF性という性質をもつ。ゆえに、③そのお椀は青性という性質をもつ。したがって、④（青性という）性質が存在する。この論証は、疑問の余地のない主張①から出発し、接続原理②を介して、派生的主張③を導き、最終的に、性質に関する存在論的主張④を結論する。ここでは「概念的真理」とも称される②が争点となりうるが、日常的な言語実践に参加している者であれば誰でも、②を認めるはずである。なぜなら、それを否定することは、そのお椀は青いにもかかわらず、青いという性質をもたないと主張することと同じであるからだ。こうした主張を行うのは、「性質」という語（先ほどの記法を用いれば〈性質〉）の使用規則を知らない者か、またはわれわれの言語実践に埋め込まれた推論規則を意図的に無視する者であろう。

イージー・アプローチもまた、カルナップの洞察からヒントを得ている。周知のように、カルナップは、存在の問いを、言語的フレームワークに「内的な問い」と、それに対して「外的な問い」とに区分し、前者の問いのみが理論的な仕方で（カルナップの言い方では「科学的に」）解答可能であるとした。たとえば「机の上に白い紙きれは存在するのか」を物言語（the thing language）のフレームワークにおける内的な問いとして解すれば、それは経験的な方法によって容易に答えが得られる。また、自然数を指示する語彙をもつ言語的フレームワークを採用し、その内側で「一〇〇よりも大きい素数は存在するのか」と問うとき、その問いは純粋に論理的な仕方で解答可能である。これに対し、いずれのフレームワークからも独立して、「物は存在するのか」や「数は存在するのか」と問うたとしても、それらの外的問いには科学的な仕方で答えることができない。なぜかと言えば、「科学的な意味で実在的である〔存在する〕とは、体系の一要素であることを意味し、したがってこの概念

〔実在性・存在〕を有意味な仕方で体系それ自体に適用することはできない」（Carnap 1956:207; 邦訳二五六頁）からである。むろん、それらの問いを特定のフレームワークを採用したうえで、その内側における内的問いとして捉えることもできよう。しかしながら、物言語のフレームワークを採用すれば、「物は存在する」という答えがトリヴィアルに（分析的に）得られ、数言語のフレームワークを採用すれば、「数は存在する」という答えが同様のかたちで得られる。というのも、これら二つの答えは、それぞれ「当該のフレームワークが空でない」と述べているに等しいからである。

トマソンの戦略は、日常言語をフレームワークとして採用したうえで、（そのフレームワーク内で表現された）存在の問いを「内的問い」として扱うというものだろう。たしかに、そうした戦略をとれば、存在の問いはトリヴィアルに解答可能であるように見える。だが、たとえそれがエレガントであるとしても、「なぜ日常言語なのか」という言語の選択の問題は、ハーシュの理論においてと同様、残されたままである。

第四節　デフレ主義と実践的アプローチ

われわれは第二節と第三節において、二つのデフレ主義を検討し、そのいずれもが何らかの仕方でカルナップの見解に結びついていることを確認した。しかしながら、現代のデフレ主義者たちの目的――存在の問いの深遠さを否定する（かつ、返す刀で常識存在論を擁護する）という目的――を達成するためには、「トリヴィアル性」に訴える方法しかないのか。たしかにハーシュの次の言葉は、現代の存在論的論争にコミットしたくない人たちにとっては魅力的に響くだろう。

改訂主義者たちは、実際にはこれらの問いが滑稽なほどトリヴィアルであるときにも、それらが哲学的に深遠な問いであり、こみ入った理論的論争を招くという幻想に悩まされている。「テーブルが存在することは可能なのか」、「自動車は

タイヤを交換しても同一のものとして存続することができるのか」、「二つのものが第三のものを組成しないことは可能であるのか」――こうした問いへの唯一の分別のある答えは次の通りである。「もちろん可能だ。いったい君は何を言っているんだ」。こうしたやり方で問いを退けること、それらをまったくトリヴィアルなものとして扱うことは、それらの問いを構成する語と概念の理解に含まれていることの一部である」（Hirsch 2011: 102）。

われわれはハーシュらのこうしたやり方に満足できない。それはなぜか。第一に、存在論的問いの深遠さを否定したいのであれば、別のより穏健で説得的な方法があると思われるからである。第二に、ここで挙げられる問い（ないしそれに類似する問い）の中には、彼らが言うほどトリヴィアルには見えないものも含まれるからだ。ここでは主に第一の点について考えてみたい。（第二の点については本節の最後で短く論じる。）

先述のように、カルナップは存在の問いを「内的問い」と「外的問い」とに区分し、前者のみが理論的な仕方で解答可能であるとした。しかし、外的問いは無意味な問いとして完全に排除されてしまったわけではない。カルナップ自身は、外的問いが「問題含みの性格をもつ」としながらも、それを言語的フレームワークの選択に関わる実践的な問いとして位置づけようとした（Carnap 1956: 206; 邦訳二五五頁）。つまり外的問いは、どのフレームワークを選択するのかという決定（decision）に関する問いとして捉え直されたである。このことを現代のカルナップ主義者たちは、「クワイン的枠組みからの脱却」を強調するあまり、意図的に等閑視しているように見える。カルナップは「物言語」と「現象主義的言語」との対立を念頭に置きつつ、前者のフレームワークの選択について次のように述べる。

> 物言語を受け入れるという決定それ自体は認識的な性格をもつわけではないが、それでも通常は理論的知識の影響を受けるものであろう。［・・］物言語を使用することの効率性（efficiency）、効力（fruitfulness）、単純性（simplicity）はそ

の決定因子のうちに含まれるかもしれない。そして、これらの性質に関する問いはたしかに理論的な性格をもつ。しかしこれらの問いを実在論の問いと同一視することはできない。それはイエスかノーかで答える問いではなく、程度を許容する問いである（Carnap 1956: 208; 邦訳二五七頁）。

カルナップはフレームワークの決定を、理論的な問題ではなく、たんに実践的な問題にすぎないとしながらも、同時に、そこで用いられる「効率性」や「単純性」といった基準が理論的な性格をもつことを認めている。むろんカルナップも言うように、そうした「理論的美徳」にもとづく決定は「程度を許容する」ものである。「『物言語の効率性という事実が、物の世界の実在性の確証する』のではなく、むしろわれわれは『この事実は物言語を受け入れることを望ましく（advisable）する』と言うべきである」（*idem.*）と述べるとき、カルナップは間違っていない。だが、こう述べるカルナップは本当にクワインと対立しているのであろうか。そうは見えない。そこには明らかにクワイン流の「理論選択」との類似性が見て取れるからである。

われわれは、デフレ主義を「トリヴィアルなアプローチにもとづくデフレ主義」（「トリヴィアルデフレ主義」）と「実践的アプローチにもとづくデフレ主義」（「実践的デフレ主義」）とに区分し、後者の立場を支持することを提案したい。この立場は、外的問いについてカルナップが指摘した「実践」（フレームワークの選択・決定）との親和性をもち、ゆえにクワインの標準的方法の枠から大きく逸脱するものではない、という意味で穏健な立場である。[6] また、それは常識存在論をより自然な仕方で擁護する方法でもある。

この立場の概略を、信念や欲求といった命題的態度の存在問題に即して素描してみたい。よく知られているように、デネットは、命題的態度を自己や他者に帰属させるわれわれの実践（素朴心理学）から出発し、心の解明を行おうとした。なぜこうした戦略（志向スタンス）が、脳科学（物理スタンス）の戦略と並んで、正当化されるのか。それはもっぱら行為者の行

動の説明と予測に際して効率的であるからに他ならない。志向スタンスの戦略を支持する存在論者であれば、「信念は存在するのか」、「欲求は存在するのか」という存在の問いに対して、次のように答えるに違いない。「もちろん存在する。なぜかって？進化の過程で人間が獲得し、大多数の人が幼児期に習得する『心の理論』、すなわち素朴心理学は、『信じる』や『欲する』という語彙を含み、それらの語彙を用いた命題は（多くの場面で真であり）、人々のふだんの行動の説明や予測に成功してきたからである。それは人々の行動を、物体のふるまいとして法則的に説明・予測する物理スタンスよりもずっと効率的である」[7]。こうした回答を行う存在論者は、「トリヴィアル性」に訴えて「もちろん信念や欲求は存在する」と主張しているわけではない。そうではなく、ある命題――「ミノルは、妻にバラを贈りたいという欲求をもち、かつその花屋に行けばバラを買うことができるという信念をもっていたので、その花屋に行ったのだ」――が、ミノルの行動を合理的に説明する理論の一部であり、その命題は信念と欲求の存在にコミットするがゆえに、「もちろん」と答えたのである。さらに、その存在論者は次のように付け加えることもできる。「ポイントは『信念』や『欲求』と呼ばれるものが存在するか否かではない。それは存在論の標準的方法からスムーズに導かれる。むしろ重要なのは、それらがいったい何であり、どのように存在するのかという問題である」[8]。このように述べる者にとって、「存在の問い」は深遠なものである必要はなく、それが哲学的探求の中で果たす役割は比較的小さなものにとどまるだろう。つまりハーシュやトマソンの議論に見られるような極端なデフレ主義的態度を取らずとも、存在の問いへの「実践的アプローチ」を採用すれば、デフレ主義の目的は十分に達成されるのである。また、このアプローチは（心的態度の存在を含む）常識存在論を帰結するものであり、この帰結自体にハーシュもトマソンも異論はないはずである。既存のデフレ主義よりも優れているのは、なぜ心的態度にコミットする（言語）実践を重く見るのかについて、（いざ求められれば）根拠を与えられるという点である。

一つだけ補足しておこう。先の議論では素朴心理学を「最良の理論」の一つと見なした。このことは、第一節で挙げた存在論的コミットメントの基準に関する「手続き」の（i）から、括弧に入れておいた「科学」を削除することを意味する。

なぜなら、素朴心理学は科学理論というよりは、むしろ「生活実践」に根差した理論であるからだ。[9]（この点において、われわれは正統的なクワイン主義者ではない。）同様のことは、「素朴物理学」（naïve physics）についても成り立つだろう。テーブルや椅子といった日常的対象の存在をめぐる問いは、科学理論とは言い難い素朴物理学を「最良の理論」の一つと見なすことで――ハーシュやトマソンとは異なる仕方で――解決される。

しかしながら、こうした「実践的デフレ主義」に対しては、次のような疑念の目が向けられるかもしれない。「実践にもとづく『理論』がある目的にとって有用であり効率的であることに異論はない。しかし君たちの実践はシステマティックに誤っているかもしれない」。この種の反論は、デフレ主義者というよりは、むしろ正統的なクワイン主義者や改訂主義者から提出されるだろう。これに対して、われわれは次のように応答したい。「存在するものはすべて微細な粒子から成る」や「心的状態はすべて脳の物理的状態である」といった科学あるいは形而上学のテーゼがたとえ真だとしても、そのことがテーブルや信念の存在にコミットするわれわれの実践を覆すものではない。この応答の仕方はストローソンが「自由と怒り」の中で表明した態度と類似性をもつ（ストローソン2010）。ストローソンが同論文の中で、道徳的責任の問題を、決定論に関する形而上学的問題から切り離したことはよく知られている。ストローソンによれば、われわれが対人関係の中で示す「反応的態度」（怒りや感謝など）が、他人を道徳的責任の主体として捉える実践を正当化するのであり、そうした実践は、決定論――自由意志を否定することによって道徳的責任の存在も否定する形而上学理論――のテーゼがたとえ真だとしても、ひっくり返されるようなものではない。最終的に、実践的アプローチは、こうした実践の「強固さ」にもとづく論証によって補完される必要があるだろう。こうして補完された実践的デフレ主義は、通常の意味でのプラグマティズム（有効性や効率性にもとづく理論選択）を含むだけでなく、必ずしも選択されたわけではない実践が存在論を制約することを積極的に受け入れる立場となる。[10]

最後に、われわれが既存のデフレ主義者たちに向けた第二の反論――「存在の問い」の中には、彼らが考えるほどトリヴィ

アルには見えないものも含まれる――について一言だけ述べておきたい。「個々人たちに加えて社会的集団（social group）は存在するのか」、さらには「集団の信念や意図は存在するのか」といった問いは、論争的な性格をもち、社会科学の哲学の中でなお盛んに議論されている。社会科学におけるモデルはこれらの問いにどう答えるかに応じて変動しうる。たとえば後者の問いに「ノー」と答える者と「イエス」と答える者とでは、ある集団の行動を説明・予測するために用いるモデルが異なるだろう。[11] エプステインが述べるように、「欠陥をもつ存在論は欠陥をもつ科学に至る」（Bad ontology leads to bad science）とすれば、そうした問いは、世界の適切なモデル化にとって大きな意味をもつものであり――たとえ深遠ではないとしても――トリヴィアルな仕方で片づけられるものではない。[12] こうしたケースにおいても、われわれの実践的アプローチは、既存のデフレ主義よりも説得的な仕方で存在の問いに取り組むことができるはずである。

参考文献

Berto, F. (2012). *Existence as a Real Property: The Ontology of Meinongianism*, Springer.

Carnap, R. (1956). "Empiricism, Semantics, and Ontology", in *Meaning and Necessity: A Study in Semantics and Modal Logic*, Enlarged Edition, University of Chicago Press, Supplement A: 205-221.（永井成男他訳『意味と必然性』、紀伊国屋書店、一九九九年）

Chalmers, D., Manley, D., Wasserman, R. (eds.), (2009). *Metametaphysics: New Essays on the Foundations of Ontology*, Clarendon Press.

Davies, D. (2004). *Art as Performance*, Blackwell.

Dennett, D. (1991). "Real Patterns," *Journal of Philosophy* 88 (1): 27-51.

Epstein, B. (2015). *The Ant Trap: Rebuilding the Foundations of the Social Sciences*, Oxford University Press.

Hirsch, E. (2011). *Quantifier Variance and Realism*, Oxford University Press.

中山康雄（2004).『共同性の現代哲学――心から社会へ』、勁草書房

Quine, W. V. O. (1963). “On What There Is”, in *From a Logical Point of View*, Harper & Row: 1-19.（クワイン『論理的観点から――論理と哲学をめぐる九章』、飯田隆訳、勁草書房、一九九二年）
Quine, W. V. O. (1966). “On Carnap’s View on Ontology”, in *The Ways of Paradox and Other Essays*, Harvard University Press: 203-211.
Rosen, G. (1990). “Modal Fictionalism”, *Mind*, Vol. 99, No. 395, 1990: 327-354.
Schaffer, J. (2009). “On What Grounds What”, in Chalmers *et al.* (eds.) (2009): 347-383.
ストローソン・P・F「自由と怒り」(2010). 門脇俊介＋野矢茂樹［編・監修］『自由と行為の哲学』、春秋社
Thomasson, A. (2008). “Existence Questions”, *Philosophical Studies*, 141: 63-78.
Thomasson, A. (2015). *Ontology Made Easy*, Oxford University Press.

註

（1）ここで言う「存在の問い」（existence questions）とは、一般的には「世界にはいったい何が存在するのか」、個別的には「性質は存在するのか」、「（複合的な）物は存在するのか」といった無限定の問いを指す。後に言及するように、それはカルナップが「外的問い」（external questions）と呼んだ問いである。

（2）虚構主義は、クワイン的手続きにおける（i）と（ii）から（iii）へのステップを認めない立場である。すなわち、ある理論におけるXへの量化がXへの存在論的コミットメントを含意することを認めつつも、そこから文字通りXが存在することを信じる必要はないと説く（Rosen 1990）。これに対し、マイノング主義は、Xへの量化とXへの存在論的コミットメントとは「別物」だと考え、（i）から（ii）へのステップ自体を疑問視する（Berto 2012）。

（3）この立場は、極度に倹約的な「デフレ主義的存在論」ないし「消去主義」を含意するものではない。それどころか、しばしば存在論的デフレ主義は「寛容な存在論」と結びつく立場として知られる。

（4）改訂主義者が改訂主義者の言語（たとえばニヒリスト言語）を用いながら、（日常言語にもとづく）常識存在論の主張は誤ってい

ると説くのは筋違いだとする議論は十分に理解できる。しかし多元主義の立場に立てば、ここから端的に「常識存在論は正しい」と結論することはできないだろう。

（5）〈K〉という表記は、発音や綴りによってではなく、意味によって個別化された種名辞を表す。同一の発音と綴りをもつ「football」の意味は、イギリス英語とアメリカ英語とでは異なるといったことを等閑視すれば、たんに「K」と表記してもよい。

（6）ただし、クワインとカルナップを「反形而上学的なプラグマティスト」（Schaffer 2009: 349）として一括するような議論に対しては慎重でなければならない。よって次の含蓄に富むクワインの言葉、および「クワイン――カルナップ論争」の哲学史的な再評価については、機会をあらためて論じることにしたい。

「カルナップは、存在論的な問い、同様に、論理学的あるいは数学的な原理についての問いが、事実に関する問いではなく、科学にとって便利な（convenient）概念的図式ないしフレームワークの選択に関する問いだと主張した。私は、同じことがあらゆる科学的仮定において認められる場合にのみ、これに同意する（Quine 1966: 211）」。

（7）デネット自身は道具主義者であり、命題的態度の存在にコミットしているわけではないという反論もあるだろう。しかし、一九九一年の論文におけるデネットの立場は、命題的態度に関する実在論（彼はそれを「準実在論 semirealism」と呼ぶ）の側に傾いているように見える（Dennett 1991）。

（8）こうした態度は第一節で言及した「基礎づけ」論者たちの態度と共通点をもつ。だが、彼らは存在論的コミットメントの基準および理論選択の方法を用いない点で、われわれのアプローチとは異なる。

（9）中山康雄は、素朴心理学を「理論」ではなく、ある種の「スキル」ないし「態度帰属のゲーム」と呼ぶ（中山2004: 48）。

（10）この考え方は、デイヴィスが芸術存在論について述べた「実践的制約」（pragmatic constraint）に近い（Davies 2004: Ch1.）。デイヴィスによれば、芸術作品の存在論的地位に関する主張は、われわれの芸術実践（創造、鑑賞など）の諸特徴によって大きく制約される。また、芸術存在論の適切さは、そうした実践に即したものであるか否かに応じて測られる。

（11）「モデル化」することと、「何が存在するのか」に答えること（真面目な存在論的探求）とは異なるという反論が予想される。この反論は的を射ているが、われわれの実践的アプローチは、まさに両者のあいだにある（と想定される）明確な境界線を疑問視する。あるタスクを遂行するプログラムをつくる際に、世界（の一部）をモデル化する応用オントロジストたちは、両者の区別

にそれほどこだわらない。その意味で、彼らはわれわれの言う「実践デフレ主義者」だと述べることができよう。

(12) Epstein 2015:40. エプステインは、十九世紀ドイツの病理学者フィルヒョウの「細胞説」における存在論の誤り（「解剖学的事実は余すところなく細胞に関する事実によって決定される」）が、彼の科学的説明にダメージを与えたという事実に言及し、それとのアナロジーを用いて、個人主義的な存在論の誤謬（「社会的事実は個人に関する事実によって余すところなく決定される」）が欠陥のある社会科学を導くと説く。

（九州大学大学院人文科学研究院）